

「戦争を抑止できるものは何か」

2020年09月23日

名古屋大学名誉教授の宇宙物理学者・池内了氏の『科学者と軍事研究』を読んで、感銘を受けた。アジア・太平洋戦争の痛手から、戦後、大学は軍事研究・開発には参与しないと、固い意志表示を幾度かしてきた。しかし最近の事態は、軍学共同で、軍事装備品の開発を目的として、情報交換・アイデアの提供・基礎研究や開発研究などが行われ、研究費は文科省より、防衛省の方がはるかに多くなっている。池内氏はこの事態に対し、「共同という対等な関係のように見えますが、実際には『軍』がスポンサーとなって、『学』を軍事開発の下請け機関化することに他ありません」と警鐘を鳴らしている。一貫して、軍事動員に与せず、「科学者の良心」を訴えている。

岩波の月刊誌『世界』の10月号に、池内氏が「戦争を抑止できるものは何か」を寄稿している。示唆に富む論考なので紹介し、私の感想を述べたい。

まず、現代は、戦争（暴力）によって紛争を解決する時代ではなくなり、戦争が国家間の対立を解消する手段ではなくなった。第二次世界大戦後、大国の小国への武力介入、領地の境界・利権を巡る争いや、宗教的対立は続いているが、国力を傾けるような大戦争は止揚されてきている。しかし、軍拡競争は止まらない。その理由は、① 権力者、為政者が権力を維持するために、外敵による脅威を煽っている。② 軍事大国（米国、ロシア、中国）及び、軍事同盟諸国において、軍産複合体の醸成、それを支える官僚機構の利権の維持・拡大のための政治を行っている。③ 国民の間で、武力で国を守らなければ危険であるという意識が強化している。果てしない軍拡競争を、池内氏は「軍事的抑制のパラドックス」と言っている。軍事力によって戦争を抑止しようとすると、果てしない軍拡競争のアリ地獄に落ち込んでしまう。軍拡論者たちは、仮想敵国の脅威論を立て、「座して自滅するのか」と国民を脅迫する。池内氏は、「国家による軍事的安全保障」に対し「人間の安全保障」を提唱している。個々人の生命・生活・人権を最優先し、「人間力による戦争の抑止」を目指すべきである。人々の安全と安心を第一とし、そこには、軍事力は一切関与しない。日本国憲法は、国家間での紛争や対立や意見の齟齬があった場合、武力に訴えることなく、説得・交渉・妥協などの平和的な外交手段で解決を図ると謳っている。「戦争を招かない最大の抑止力は、人間の理性であり、寛容の精神であり、それらを人間すべてが共有しているとの信念なのである。」最後に下記の言葉で締め括っている。「今私たちが自問すべきなのは、そのような憲法の平和主義を貫徹するような努力を本当に行っているか、ということなのである。私はかつて『ピカソで国を守ろう』というスローガンを唱えたことがあるが、平和主義は文化の粋が満ちている国でこそ実現すると思っている。」

現実には、池内氏が言うような対話外交によっては、解決しないと言う人が多いだろう。しかし、共生・共存を願う人間の理性、希望を醸成する文化の意味と力を信じたいと思う。

根岸線沿線九条の会は、大船、本郷台、港南台、洋光台、森、磯子の6つの「九条の会」が連携し、講演会や駅前宣伝をしてきた。私は、次の講演会に池内氏を招こうと提案し、大変誠実な返答を頂き、来てくださることになった。コロナ禍の中で、講演会は延期しているが、近いうちに開催できる予定である。池内氏は、講演題を「天と地と人の営みーピカソで平和を築こうー」と知らせてきた。宇宙物理学の研究者である池内氏が、キュビズムの創始者ピカソから平和について論じるという。天と地と人の平和は文化の粋が満ちている国で実現するという講演が聞けるのではないかと期待している。